

莊園鎮守社における祭祀の歴史の変容

小栗栖健治

Historical Changes in Manor Tutelary Shrine Festivals

はじめに

- ① 莊園鎮守社の成立
 - ② 祭祀組織と祭祀
 - ③ 重層する宮座
 - ④ 莊園鎮守社の変容
- おわりに
- 資料編 仰木庄の祭祀・祭祀資料

【論文要旨】

祭祀は、地域社会において共同体のあり方を如実に反映する。祭祀が繰り広げられる神社は村の氏神やかつての莊園鎮守社などであり、基本的に村の氏神の場合は一村による祭祀となるが、莊園鎮守社であった場合は複数の村々による祭祀となる。この複数の村々により行われる祭祀において、莊園を単位とする祭祀組織と一村を単位とする祭祀組織という重層的構造をとる事例が散見される。こうした祭祀組織の重層性は、中世前期的な祭祀組織と中世後期的な祭祀組織の併存として捉えることが可能である。

中世後期における莊園鎮守社の祭祀で、莊園内に成立した村々の新たな組織による祭祀が成立したにもかかわらず、祭祀の核となる部分が前代的な祭祀組織により掌握されている場合がある。本来ならば消滅すべき祭祀組織が、新しい祭祀形態のなかに根強く残存していく必然性はどこに存在していたのだろうか。

宮座の歴史的展開についてはこれまでに多くの研究の蓄積があり、広域に及ぶ氏子を擁した莊園鎮守社などに祭祀組織の重層性のみられることは既に指摘されてきた。しかし、重層構造が成立する歴史的背景が十分に明らかにされたとは言いがたいのが現状である。

本稿では限られた事例であるが、近江地方を中心に莊園鎮守社に展開した祭祀の歴史の変遷を追求し、中世後期の社会において中世前期的な祭祀組織が、水運や築漁などの非農業的特権と水利・入会などの生産協同体との結びつきにより存続したことを明らかにしようとするものである。